様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　11 日現在

機関番号：12501
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2010～2011
課題番号：22890029
研究課題名（和文）性別適合手術及び戸籍上の性別変更を終えた性同一性障害当事者の心理過程に関する研究
研究課題名（英文）Study of Psychological Processes of GID Patients after Sex Reassignment Surgery and Gender Transition in the Family Registry
研究代表者
浦尾　悠子（URAO YUKO）
千葉大学・大学院看護学研究科・助教
研究者番号：40583860

研究成果の概要（和文）：
性別移行を終えた GID 当事者が、社会的相互作用の中でどのような心理過程を経て、どのような心理状態に至るのかを明らかにすることを目的に、性別移行後の GID 当事者を対象にインタビューを行った。その結果、【身体的・社会的性別違和の解消による生きやすさの獲得】により【今を生きるありのままの自己の受け止め】をし【GID 当事者としてではなく男性（女性）として生きる日常感覚】へと至る心理過程が明らかとなった。
研究成果の概要（英文）：Interviews were conducted targeting GID patients after sex reassignment surgery with the purpose of clarifying what psychological processes occur after the gender transition within a societal context. As a result, the psychological process of “learning to accept oneself as he/she is now” due to “the acquired ease of living without a physical and societal gender discrepancy” and adjusting to “a daily life as a man/woman, rather than as a GID patient” was apparent.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	660,000	198,000	858,000
2011 年度	1,080,000	324,000	1,404,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,740,000	522,000	2,262,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：地域・老年看護学
キーワード：性同一性障害　性別移行後　心理過程

１．研究開始当初の背景

わが国では、2003 年に性同一性障害（Gender Identity Disorder；以下 GID）特例法が制定されたことで、性別適合手術（Sex Reassignment Surgery；以下 SRS）後に戸籍上の性別変更が可能となったことから、SRS を受けて性別移行を望む GID 当事者数が増えており、今後も益々増加することが予想される。このような状況に伴い、GID に関する研究も、医学や心理学、社会学等の領域で近年増えつつあり、ホルモン療法や SRS などの治療を希望する GID 当事者の心理的側面に触れた研究も散見されるようになってきた。しかし、SRS までの治療を終え戸籍上の性別変更を行った後の GID 当事者の実態を明らかにした研究は、国内外ともに見当たらない。

そこで研究者は修士課程在籍時に‘性別適合手術前後における性同一性障害当事者の心理過程に関する質的研究’を行い、SRS 前

から SRS 後のプロセスにおいて、GID 当事者が辿る心理過程を明らかにした。しかし、性別移行前後のプロセスに着目していたため、性別移行を終えてから現在に至るまでの心理過程についてのデータ収集及び分析が十分ではないと考えられた。

そこで本研究では、まず修士論文（以下；研究１）で得られた結果のトライアンギュレーションを行い、次いで性別移行を終えている GID 当事者に対し半構造化面接を実施し、性別移行を終えてから現在にかけての心理過程を明らかにすることとした。

２．研究の目的

本研究は､性別移行を終えた GID 当事者が、社会的相互作用の中でどのような心理過程を経て、どのような心理状態に至るかを、当事者の語りから帰納的に明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

（１）概要

平成 22 年度は、調査票を用いた構造化面接により、研究１の結果についてのトライアンギュレーションを行った。

平成 23 年度は、性別移行後の心理過程を研究参加者の視点から明らかにするため、半構造化面接による質的帰納的研究を行った。

（２）研究参加者

平成 22 年度は、性別移行を終え A ジェンダークリニックに通院中の GID 当事者のうち、主治医の許可が得られ研究参加への同意が得られた 5 名（MtF[1]2 名、FtM[2]3 名、平均年齢 37 歳）であった。性別移行後の経過年数は平均 0.8 年であった。

平成 23 年度は、性別移行を終え A ジェンダークリニックに通院中の GID 当事者のうち、主治医の許可が得られ研究参加への同意が得られた 6 名（MtF2 名、FtM4 名、平均年齢 38 歳）であった。性別移行後の経過年数は平均 2 年であった。なお､6 名中 3 名（MtF1 名、FtM2 名）は、前年度の研究参加者であった。

（３）データ収集方法

面接は、クリニックの個室または参加者が希望する場所で、1 対 1 で行った。面接内容は、同意を得て IC レコーダーに録音した。

平成 22 年度は、研究１で抽出された各カテゴリー、サブカテゴリーに関する、計 121 項目の質問項目から成る調査票を参加者に渡し、研究者が各質問項目を読み上げ、各項目に対し「あてはまる」「あてはまらない」「どちらともいえない」の 3 件法で回答を得た。「あてはまる」と回答されなかった項目については、自由回答としてその理由を語ってもらった。

平成 23 年度は、インタビューガイドをもとに､平均 67 分の半構造化面接を実施した。インタビューガイドは、「性別移行を終えてから現在にかけて、GID 当事者としてどのようなお気持ちやお考えを持つようになりましたか」をメインクエスチョンとし、サブクエスチョンは、前年度の調査結果を反映させたものとした。

（４）データ分析方法

平成 22 年度は、調査票の項目ごとに単純集計を行った。また、自由回答のデータは逐語録に起こし、質的帰納的に分析した。調査票の集計結果と、自由回答内容を分析して得られた内容を、研究 1 の結果と照らし合わせながら結果のトライアンギュレーションを行った｡研究 1 の妥当性が確認された部分と、妥当性が不十分であった部分を整理し、平成 23 年度のインタビューガイド作成の際の参考資料とした。平成 23 年度は、録音したインタビューデータを逐語録に起こし、質的帰納的に分析した。

なお、質的帰納的分析の手順は以下の通りであった。

①逐語録を詳細に読み込み、意味内容毎に区切って、コード化した。

②コード同士の類似点、相違点などを比較分析し、似ているコードをグループ化して、仮のカテゴリー名をつけた。

③カテゴリー同士の関係を図式化することで、全体像とプロセスを把握した。

④2 人目以降のデータについても①～③を行い、新たなデータやラベルと照らし合わせつつ、カテゴリー内やカテゴリー間の理論的比較を行い、概念の抽象度を上げていった。

⑤新たなカテゴリーが見当たらなくなったら、カテゴリーをサブカテゴリーに関係づけ、ストーリーラインを構築した。

分析は適宜、質的研究に造詣が深い教員からスーパーヴィジョンを受けることで、厳密性を確保した。

（５）倫理的配慮

研究参加者には、研究協力は本人の自由意思に基づくものであり、協力を拒否・撤回した場合でも、いかなる不利益も生じないことを文書及び口頭で説明した。説明に対し同意が得られた者を研究参加者とした。

面接はプライバシー保護に十分留意して行った。また面接後は個人情報の漏洩を防ぐため、研究に関して得られたデータは施錠可能な場所で厳重に管理し、使用するパソコンにはパスワードロックをかけた。個人情報および個人データは、個人名を用いずに記号化して匿名性を確保し、研究参加者が特定されないよう留意した。

---

[1] MtF は Male to Famale の略である。

[2] FtM は Feale to Male の略である。

４．研究成果

（１）結果

平成 22 年度の構造化面接による質問項目集計の結果、「あてはまる」が 304 件、「あてはまらない」が 165 件、「どちらともいえない（もしくは非該当）」が、121 件であった。自由回答部分の分析結果も含め、研究１で得られた結果の厳密性を再検討したところ、特に‘性別移行後の GID 当事者としての自己に対する受け止め方’や、‘性別移行前の過去の自分に対する思い’についてのデータが不十分であったことが示唆された。

以上のような平成 22 年度の結果を参考に実施した平成 23 年度の研究の結果、得られたカテゴリー・サブカテゴリーは以下の通りであった（表１参照）。

表１

カテゴリー	サブカテゴリー
身体的・社会的性別違和の解消による生きやすさの獲得	身体的違和感の大幅軽減によるボディーイメージの統合感
	戸籍上の性別変更による社会生活上の煩わしさの解消
	他者が認知する自己像に対する囚われの軽減
	内的プレッシャーからの解放により可能となった自然な自己表出
今を生きるありのままの自己の受け止め	完全に男性（女性）になることはできないという現実の再認識
	ＧＩＤ当事者としての自己の生に対する肯定的意味づけ
	ＧＩＤ当事者として生きてきた性別移行前の自己に対する心理的距離感
ＧＩＤ当事者としてではなく男性（女性）として生きる日常感覚	ＧＩＤ当事者であることを隠さずに生きることが憚られる社会
	男性（女性）として社会に適応しつつ追求する自分らしい生き方
	ＧＩＤ当事者であるという自己意識の低減感覚

まず全体のストーリーラインを示し、その後、各カテゴリー・サブカテゴリーに沿って結果の概要を示す。なお、カテゴリーは【　】、サブカテゴリーは≪　≫、当事者の語りは「　」と性別（MtF 又は FtM）とし、・・は省略、（　）内は研究者の補足とした。

ストーリーライン

性別移行を終えた GID 当事者は、身体的違和感の大幅な軽減によりボディーイメージの統合が促進され、戸籍変更により社会生活上の煩わしさが解消されることで、次第に他者が認知する自己像に対する囚われが軽減し、自然な自己表出が可能となっていた。これらは【身体的・社会的性別違和の解消による生きやすさの獲得】のプロセスであった。

生きやすさを獲得する一方で、性別移行後の GID 当事者は、完全に男性（女性）になることはできないという現実を再認識しており、そのような現実認識を持ちながら、GID 当事者としての自己の生に対する肯定的意味づけをしていた。また、GID 当事者として生きてきた性別移行前の自己に対しては心理的に距離感を持つようになっていた。これらは【今を生きるありのままの自己の受け止め】のプロセスであった。

更に、GID 当事者にとって性別移行後の社会は、当事者であることを隠さずに生きることが憚られる社会であり、性別移行後は GID 当事者としてではなく、女性（男性）として社会に適応しながら、自分らしい生き方を追求するようになっていた。また、GID 当事者であるという自己意識は徐々に低減していた。これらは、【GID 当事者としてではなく女性としての日常感覚】を抱くプロセスであった。

①【身体的・社会的性別違和の解消による生きやすさの獲得】

≪身体的違和感の大幅軽減によるボディーイメージの統合感≫

GID 当事者は、性別移行前には「あるべきじゃないものがあるっていう感じ」FtM「女体であることが気持ち悪いんですよね」FtM など、自己の身体的性別やボディーイメージに対して強い違和感を持っていた。しかし、SRS により身体的性別が望む性別に近づいたことで、「身体の違和感がほとんどなくなって」FtM「想像通り楽ですね」FtM「理想の身体に近づいた感じです」MtF「やっとイコールになった」FtM などと語られた。SRS により身体面での性別違和が大幅に軽減したことで、ボディーイメージを含む自己概念の統合が促進されており、身体面での生きやすさを獲得していた。

≪戸籍上の性別変更による社会生活上の煩わしさの解消≫

社会生活の中で、戸籍上の性別が明記される書類の手続き（住民票、履歴書、保険証、会員証等）が必要となる度に、「いちいち説明したりするのがほんとに面倒くさかった」FtM「時間の無駄」FtM など、煩わしさや不快感を強く感じていた。また、戸籍上の性別変更は「社会で生きていくためのバランス」FtM を保つために重要と感じられており、性別変更後は「書類の手続きがとにかく楽になりましたね」FtM「生きやすくなった」MtF「チャレンジしたかったことにチャレンジできるようになりました」MtF などと語られた。

戸籍上の性別を変更することで、書類手続きに関する煩わしさが大幅に解消され、社会生活が円滑に送れるようになった、というこ

とを実感していた。

≪他者が認知する自己像に対する囚われの軽減≫
性別移行前は特に「人から（性別を）どう見られるかが重要だった」MtF ため、「男に見えているかな？」FtM などと気にしていたが、性別移行後は、「私は女と主張できるようになりました」MtF「周りの評価をあまり気にしなくなったかも」FtM などと語られた。
GID 当事者は、性別移行前から性別移行の直後にかけては、他者が認知し判断する自己の性別について強く意識しており、そのことへの囚われが強いが、性別移行を終え、望んだ性別の人として生活を始めると、徐々に他者からの認知に対する囚われが軽減していた。

≪内的プレッシャーからの解放により可能となった自然な自己表出≫
性別移行前は、GID 当事者としての自己を表出することに対する内的プレッシャーが強く、「本当の自分を全く出せない状態だった」FtM「我慢ばかり」MtF していた状態であったが、性別移行を終えた後は「他人にどう思われるかじゃなく、自分に正直にいられるようになりました」FtM「迷いがなくなり・・」MtF「自由にやりたいことができるようになった」FtM などと語られた。
性別移行することにより、それまで維持されていた自己表出への内的プレッシャーから解放され、ありのままの自己を自然に表出できるようになっていた。

②【今を生きるありのままの自己の受け止め】

≪完全に女性（男性）になることはできないという現実の再認識≫
GID 当事者は、性別移行を終えた自己の性別に対して、「勿論完全に違う性別になれたとは思ってない」FtM「身体は完璧じゃないわけだし」FtM「子供を産めるわけじゃないですから」MtF「本物ではないっていう気持ちは多分一生消えないと思います」MtF などと語られた。
GID 当事者は、「完全になれないという現実は受け止めつつ・・」FtM というように、性別を 100%変更することは不可能であるという現実を、性別移行を終えることで再認識することとなるものの、それを自明のこととして素直に受け止めていた。

≪GID 当事者としての自己の生に対する肯定的意味づけ≫
性別移行後は、GID 当事者である自分自身について、「この身体で生まれたことにも意味があるって」FtM「GID という状況は、他の人には体験できない・・珍しいから面白いし、そういう自分を楽しむ方がいい」FtM「究極的に GID の自分を愛しているのかもしれない」FtM などと語られた。
性別移行というプロセスを通して、GID 当事者としての自己の存在価値や、GID 当事者として生きる人生そのものを、徐々に肯定的に受け止められるようになり、自己の生に対する肯定的意味づけをするようになっていた。

≪GID 当事者として生きてきた性別移行前の自己に対する心理的距離感≫
性別移行前の過去については、「否定するつもりはないけど、あえて苦しんだ過去を振り返ることはない」FtM「思い出せなくなってる」MtF「あんな頃もあったなあ」FtM「他人事のような」FtM などと語られ、心理的距離感を持って想起されるようになっていた。
また、性別移行前の自己像については、「忘れられるなら忘れたい」FtM「写真は見たくないですね」MtF「本当の自分を表現できなかった（性別移行前の）自分が嫌」FtM など、GID 当事者としての自己像に対し否定的に語られる一方で、「過去の自分がいるから今の自分がいるから、過去の自分も大切」FtM「今だから、あんな過去も受け止められる」FtM というように肯定的にも語られ、過去の自分に対しては、両価的な心理が示された。

③【GID 当事者としてではなく男性（女性）として生きる日常感覚】

≪GID 当事者であることを隠さずに生きることが憚られる社会≫
性別移行後に望んだ性を生きる上では、GID 当事者であることを「わざわざカミングアウトする必要はない」FtM「ばれるのが嫌とかじゃなく、（カミングアウトすることで）ハンディを与えられたくないから」FtM「隠すつもりはなくても（結果的に）隠すことになる」FtM などと語られた。GID 当事者であることを「周りが知っていたら楽」FtM と感じられる部分もあるものの、世間的には GID 当事者に対する理解がまだ十分とはいえないことも認識しているため、周囲に当事者であると知られてしまうことで、周囲の人々の自分に対する態度や接し方、関係性などが変化してしまうことを危惧していた。

≪男性（女性）として社会に適応しつつ追求する自分らしい生き方≫
性別移行後は、GID 当事者としてのありのままの自己を受け止めつつ、「こっち（男性）で頑張るぞ」FtM「割り切って話を合わせることは大事」「今は普通の女性として生活で

きているから」MtF というように、GID 当事者であることを割り切りつつ、男女の社会に適応して生きる様子が語られた。また「せっかく性別を変えたんだから、自分の為に生きたい」MtF「自分らしく生きていきたい」FtM というように、性別移行により自然な自己表出が可能となったことで、自分らしい人生を追求したいと考えるようになっていた。

≪GID 当事者であるという自己意識の低減感覚≫

性別移行を終え、男性（女性）としての社会生活が長くなるにつれて、「生活の中で、自分が GID ってことをあまり意識しなくなってます」FtM「(GID 当事者であることを）つい忘れちゃう」MtF というように、GID 当事者であるという自己意識が次第に低減していく様子が語られた。このカテゴリーは、≪他者が認知する自己像に対する囚われの軽減≫や≪GID 当事者として生きてきた性別移行前の自己に対する心理的距離感≫などと関連しているものと考えられ、男性（女性）としての生活が、徐々に般化されていくことが示された。

（２）考察

以下に、カテゴリーごとに考察を述べる。

①【身体的・社会的性別違和の解消による生きやすさの獲得】

性別移行による‘生きやすさ’は、SRS による身体的性別違和の大幅軽減と、戸籍上の性別変更による社会的性別違和の解消により獲得されていた。

まず、≪身体的性別違和の大幅軽減によるボディーイメージの統合感≫とは、SRS により身体面の性別違和感覚が大幅に軽減することで、自己概念が統合されていく状態であると考える。外科的処置により身体面の違和感や嫌悪感が軽減されていくという心理過程は、美容外科手術後の心理過程とも類似する部分はあるが、内性器摘出などにより、内部感覚の違和感も軽減される点が、美容外科手術と大きく異なる点であろう。これは、GID 当事者が外見的な違和感だけでなく、自己概念におけるボディーイメージの混乱という、より根源的な違和感を抱えているためであると捉えることができる。但し、GID 当事者の中には SRS を希望せずホルモン治療の段階で留まるケースもあるため、GID 当事者の支援にあたっては、GID 当事者個々の自己概念（特にボディーイメージ）のあり方について、本人と共に十分検討しながら、それに沿った支援していくことが重要と考える。

次に、社会的性別違和の解消として、≪戸籍上の性別変更による社会生活上の煩わしさの解消≫というカテゴリーが示された。これは、社会生活において戸籍上の性別の開示が必要とされる様々な手続きの際に、その都度感じられていた煩わしさが、戸籍上の性別変更により、ようやく解消されたという感覚である。度重なる煩わしさは、GID 当事者の心理的負荷となって蓄積されていたことが推察され、それが解消されるということは、‘生きやすさ’を得ることに他ならないものと考える。このことから、性別移行前の GID 当事者や性別移行を望まない GID 当事者は、戸籍上の性別に起因する様々な心理的負荷を抱えている可能性を念頭に置いておく必要があるだろう。また、GID 当事者が極力そのような心理的負荷を感じることのないよう、戸籍上の性別の開示は必要最低限に留めるなどの配慮をしていく必要があると考える。

その他にも、性別移行後に獲得する生きやすさとして、≪他者が認知する自己像に関する囚われの軽減≫や、≪内的プレッシャーからの解放により可能となった自然な自己表出≫というカテゴリーが示された。GID 当事者が、他者が認知する自己像（性別）に囚われず、自然な自己表出ができるようになることは、GID 当事者のメンタルヘルスにとって非常に重要であると考えられ、このような観点からは、治療が適切な時期にスムーズに導入される必要がある。しかし、治療の時期や段階に関わらず、全ての GID 当事者が、自然な自己表出ができることが、より望ましいだろう。そこで、GID 当事者の支援においては、GID 当事者が自己表出への困難さを抱えている可能性を念頭に置き、困難を抱えている場合には、それが少しでも軽減されるよう心理的支援をすることや、自己表出がしやすい環境を整えていくことが重要であると考える。

②【今を生きるありのままの自己の受け止め】

GID 当事者は性別移行後に、≪完全に男性（女性）になることはできないという現実の再認識≫をしていた。このような現実は、性別移行前から認識していたことではあったが、性別移行後にはそれを自明のこととして再認識しつつ素直に受け止めていた。この現実の再認識と受け止めが、≪GID 当事者としての自己の生に対する肯定的意味づけ≫にもつながっているものと考えられる。なぜなら、性別移行前には‘望みの性別になりたい’というように、白黒思考的な完全主義傾向が強かったものが、性別移行後には、望みの性別に近づくことのできない部分も含め、グレーゾーンの自己を受け止められるように変化していたからである。このように、性別移行によりありのままの自己の受け止めが可能となるのは、性別移行前に‘自分は何者か？’と自己存在の意味を問い、アイデンティティクライシスを乗り越えて性別移行に

辿り着いているためではないかと考える。GID 当事者であったからこそ、自己の内面や社会に人生の早期から直面していくこととなり、その結果、自己洞察や自己理解が進むものと考えられるだろう。また、ありのままの自己を受け止め、自己の生に対する肯定的意味づけができるようになることは、白黒思考から離れてありのままの自己に価値を見出すプロセスである、と言い換えることもできる。ありのままの自己に価値を見出すことは、GID 当事者が主体的に自らの人生に関わっていく上での一助となるであろうし、完全主義的傾向のある GID 当事者にとっては、このような肯定的意味づけが、新たな視座をもたらす可能性がある。以上のことから、GID 当事者の支援においては、当事者自身がありのままの自己を受け止め、自己の存在に価値を見出すことができるよう、心理面での支援していくことも重要となるだろう。

但し、ありのままの自己を受け止めつつも、その一方で GID 当事者は≪GID 当事者として生きてきた性別移行前の自己に対する心理的距離感≫を抱いていた。研究 1 でも類似の結果が示されていたが、このような心理的距離感は、性別移行後の GID 当事者に特有の適応機制であると捉えることができる。また、心理的距離感を保つことが、ありのままの自己を受け止める上で重要な役割を果たしているという可能性も考えられる。以上のことから、性別移行を終えた GID 当事者の支援においては、性別移行前の過去に焦点をあてるのではなく、現在や未来へと焦点をあてた支援が必要となるものと考える。

③【GID 当事者としてではなく男性（女性）として生きる日常感覚】

GID 当事者は性別移行後に、男性（女性）として日常生活を送ることを選択し、GID 当事者であることを開示して生きるという選択はしていなかった。なぜ開示するという選択をしないのだろうか？これは、GID 当事者が性別移行前の人生において、社会に適応して生きることに多くの困難を感じていたために、性別移行後は男性（女性）として、社会に適応して生きることを強く望むようになるためではないかと考える。つまり GID 当事者が生きる社会とは、≪GID 当事者であることを隠さずに生きることが憚られる社会≫ということになるのだろう。

また、≪男性（女性）として社会に適応しつつ追求する自分らしい生き方≫というカテゴリーに示されたように、GID 当事者は性別移行後、社会に適応しながら自分らしい生き方を追求するようになっていた。これは、GID 当事者が社会適応感覚を得ることにより自分らしい生き方を追求できるようになる、ということを示している可能性があるものと考える。但し本研究の参加者は、性別移行後に概ね男女の社会に適応して生活している当事者であったために、このようなカテゴリーが生成された可能性がある。中には性別移行を終えても男女の社会に適応して生きていくことが困難に感じられる GID 当事者や、社会に適応して生きることを望まない当事者がいる可能性もあるため、GID 当事者の支援においては、当事者個々が望む社会適応のあり方を十分に理解した上で、その人らしい生き方を追求していけるよう支援していく必要があると考える。

最後の≪GID 当事者であるという自己意識の低減感覚≫というカテゴリーは、社会適応による男性（女性）としての日常生活の般化や、性別移行前の自己との心理的距離などにより生じる感覚であることが推察される。特に性別移行後の経過年数が長い GID 当事者は、GID 当事者であるという自己意識が低減している可能性があり、性別移行後の GID 当事者の支援においては、このことを念頭に置いて対応することも必要であろう。

以上より、性別移行後の GID 当事者の支援においては、GID 当事者自身が、当事者であることを強く意識することなく、自然に男性（女性）としての日常を送りながら、その人らしい生き方を追求できるよう支援していくことが重要であると考える。

（３）本研究の限界と今後の課題

本研究の結果全般においてポジティブな概念が生成されたのは、本研究の参加者が、精神的健康度の比較的高い参加者であった可能性が考えられる。今後は更に研究参加者数を増やし、この点について更に検討していく必要があると考える。

５．主な発表論文等

〔図書〕（計１件）

南野知惠子他（編）、メディカ出版、性同一性障害の医療・法－医療・看護・法律・教育・行政関係者が知っておきたい基礎と対応－、2012（in press）

６．研究組織

(1)研究代表者

浦尾　悠子（URAO YUKO）
千葉大学大学院看護学研究科・助教
研究者番号：40583860